



第26回（2023年度）大会プログラム・発表要旨集

主催：日本語用論学会 後援：日本語教育学会

日時：2023年12月9日（土）／10日（日）

会場：創価大学 中央教育棟

〒192-8577 東京都八王子市丹木町 1-236

アクセス <https://www.soka.ac.jp/access/>

※12月8日（金）に若手研究者・大学院生向け「前夜祭！ 共同研究ノススメ」を開催

大会受付	1階エントランスホール
会員総会・基調講演	AW302
シンポジウム	AB103
研究発表	AW404、AW403、AW402 AC531（9日）、AE351（10日）
ポスター発表	AC533
書籍展示	AW401
大会本部	AW511
参加者休憩室	AC534（9日）、AB102（10日）
語用論茶寮	AE351
懇親会	ニュープリンス食堂

今大会は、**事前参加申込を必須**としております。ご参加される方は、学会公式ウェブサイトをご覧ください、早めにお申し込みくださいますようお願い申し上げます。また、大会期間中は、学内の食堂・グランカフェは営業していません。大学の近隣には食堂等はありません。**昼食は各自でご持参**くださいますようお願い申し上げます。

★ 本プログラム目次 ★

	大会テーマ・スケジュール・大会参加登録	p. 3
	大会会場案内 ・会場図	p. 4
	プログラム一覧表	p. 9
9日	特別講義	p.14
	ワークショップ	p.14
	□頭発表 room 1	p.17
	□頭発表 room 2	p.19
	□頭発表 room 3	p.20
	□頭発表 room 4	p.21
	会員総会	p.23
	基調講演	p.23
10日	□頭発表 room 1	p.24
	□頭発表 room 2	p.25
	□頭発表 room 3	p.26
	□頭発表 room 4	p.28
	ポスター発表	p.28
	語用論茶寮	p.30
	シンポジウム	p.30
	大会発表賞表彰式・閉会式	p.31

★大会テーマ★
日本語教育のために語用論ができること

★ 大会スケジュール（概要） ★

12月9日（土）

10:20～12:00：特別講義
10:20～12:00：ワークショップ1
10:20～12:00：ワークショップ2
13:00～15:40：口頭発表1（Room 1）
13:00～15:40：口頭発表2（Room 2）
13:00～15:40：口頭発表3（Room 3）
13:00～15:40：口頭発表4（Room 4）
15:50～16:10：会員総会
16:15～17:45：基調講演
18:00～：懇親会

12月10日（日）

9:00～11:40：口頭発表1（Room 1）
9:00～11:40：口頭発表2（Room 2）
9:00～11:40：口頭発表3（Room 3）
9:00～9:35：口頭発表4（Room 4）
10:00～11:30：ポスター発表
11:40～13:10：語用論茶寮
13:10～15:40：シンポジウム
15:40～16:00：大会発表賞表彰式・閉会式

★ 大会参加登録・参加費 ★

事前登録

日本語用論学会会員：1,000円	日本語用論学会学生会員（院生・学部生）：無料
日本語教育学会会員：1,000円	日本語教育学会会員（院生・学部生）：無料
非会員一般・院生：2,000円	非会員学部生：無料

※会員の方は日本語用論学会公式ホームページ⇒「会員専用ページ」⇒「大会参加」で登録。

※非会員の方は日本語用論学会公式ホームページ⇒「参加申込フォーム」にて登録。

※日本語用論学会会員は、今年度会費が納入済みでないと、事前登録ができません。

※事前登録を完了させるには、参加費の事前納入（クレジット決済・銀行振込）が必要です。

会場で参加費の支払いはできません。必ず事前に納入を済ませてください。

※事前登録の締切は **12月5日（火）**です。

会費・大会参加費免除について：

日本語用論学会では、激甚災害およびこれに準ずる災害で被害に遭われた会員の皆様に対し、お申し出いただいたくことにより、当該年度の「年会費」ならびに「年次大会参加費」を免除させていただきます。（すでに会費納入がお済みの場合、次年度の会費に充当することも可能です。）

また、「新型コロナウイルス感染症」の直接・間接的影響による著しい経済的な影響を被っている会員の皆様におかれましては、以下の連絡先にまずはご相談ください。

【日本語用論学会事務局】

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-8
大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻
秦かおり 研究室内

E-mail: secretary (at) pragmatics.gr.jp

★大会会場案内★

〔交通について〕

★JR 八王子駅北口のバスロータリー11, 12 番乗り場（土曜日 12:30 までは 14 番乗り場）、または京王八王子駅 4 番乗り場から、以下の行き先のバスにご乗車ください。

・「創価大学循環」

※「創価大学創大門」または「創価大学栄光門」で下車。

・「創価大学栄光門」行き（直通）

※「創価大学栄光門」で下車。

・「創価大学正門東京富士美術館」行き・「創価大学正門経由工学院大学」行き

※「創価大学正門東京富士美術館」下車。正門から入構いただくこととなりますが、中央教育棟から距離があり、別の行き先のバスに乗車されることを推奨いたします。

※「八日町経由」と「ひよどり山トンネル経由」があります。乗車時間が短いのは「ひよどり山トンネル経由」です。

※会場に比較的近いのは「創大門」「栄光門」バス停です。



〔会場について〕

・大会会場は創大門から見て正面にある「中央教育棟」です（創大門から徒歩5分・上り坂となっています）。栄光門からお越しの場合、門から5分ほど直進していただき、左手に中央教育棟がございます。

・12月9日、10日は両日ともに食堂・グランカフェは営業しておりません。大学の近隣にも食堂はありません。**昼食は各自でご持参くださいますようお願い申し上げます。**

・中央教育棟 B1 のローソンは9日（土）9：00～16：00 は営業予定ですが、10日（日）は休業です。
・学生ホール 1F の売店は9日（土）9：00～17：00、10日（日）10：30～14：00 に営業予定です。
・会場から少し距離がありますが、東京富士美術館（創価大正門近く）のカフェは両日 10:00～16:30（ラストオーダー16:00）営業しています。美術館を利用しなくてもカフェ利用は可能です。

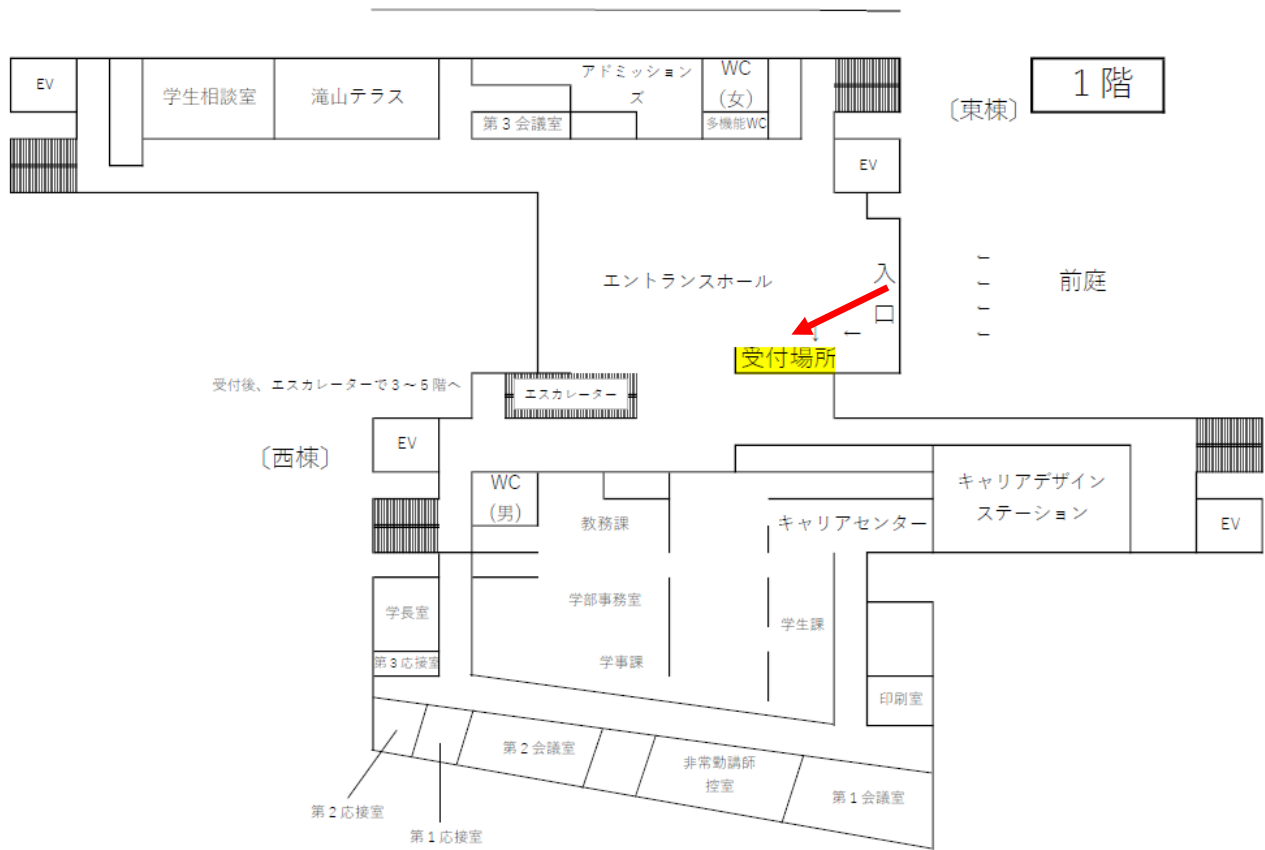
・食料品、文具などは学生ホール1階（中央教育棟から約5分）や中央教育棟地下1階のローソン（土曜日のみ）にてご購入いただけます。

・最寄りの自動販売機

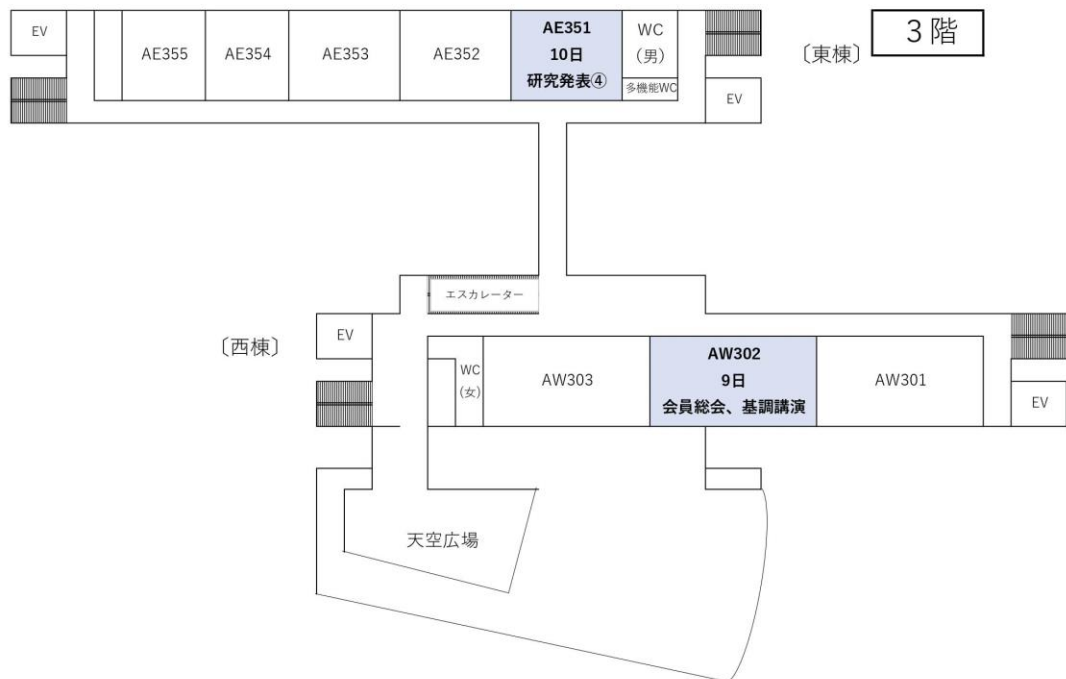
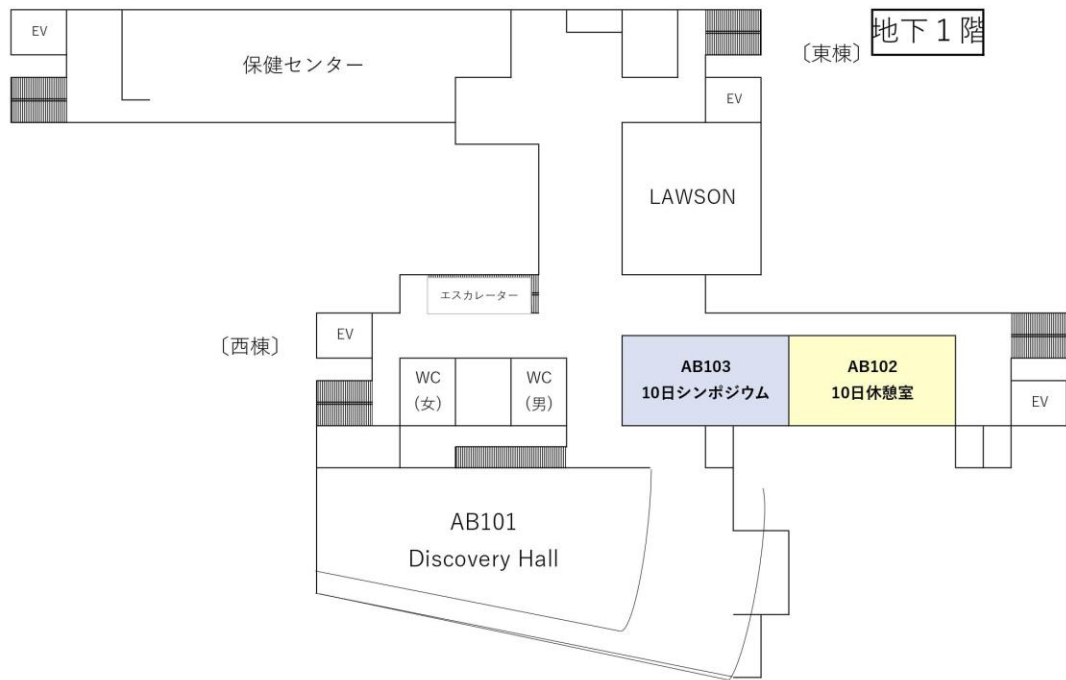
中央教育棟 B1 のローソン前ベンチ、1F の滝山テラス内、4F のグランカフェ内、各食堂前、創大門バス停横、栄光門バス停横に自動販売機が設置してあります。また学生ホールでも飲料を販売しております。



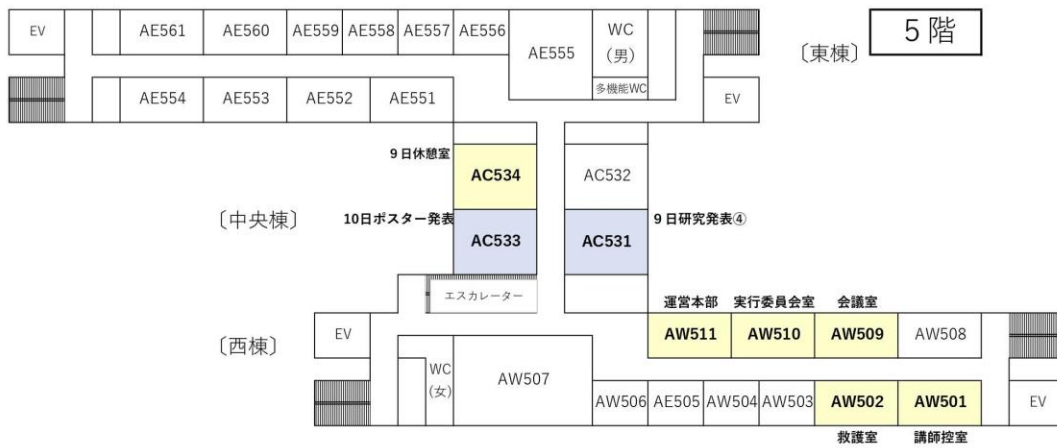
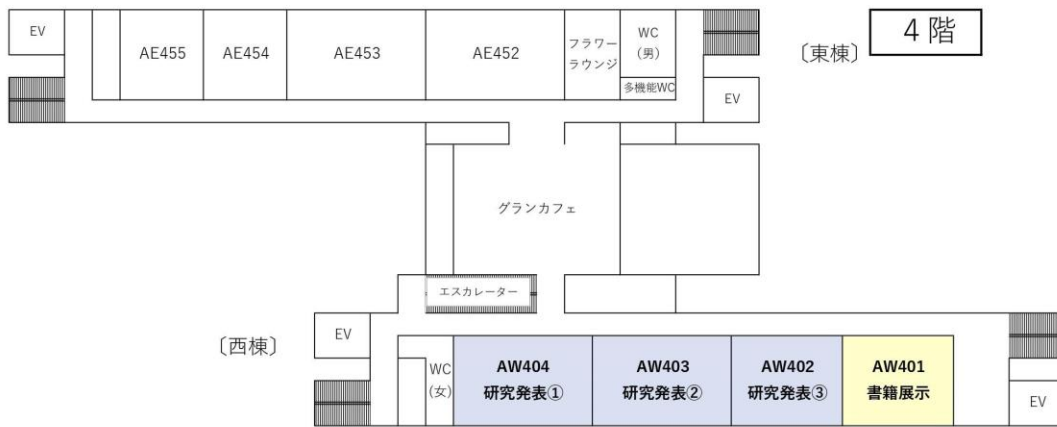
教室・研究室配置図 【中央教育棟・GLOBAL SQUARE/ 1階】



教室・研究室配置図 【中央教育棟・GLOBAL SQUARE/ 地下1階・3階】



教室・研究室配置図 【中央教育棟・GLOBAL SQUARE/ 4～5階】



日本語用論学会 第26回大会 プログラム(一覧表)

大会テーマ：日本語教育のために語用論ができること

開催日時：2023年12月9日(土) 10:20、10日(日) 9:00 開始

オンラインで参加される方へのアクセスリンクは、12月8日(金)に、参加費を支払い参加登録を完了された方に宛て、メールでお届けする予定です。

【12月9日(土)】

	Room 1 [AW404]	Room 2 [AW403]	Room 3 [AW402]	Room 4 [AC531]
	<p>【特別講義 (Special Lecture)】 司会：秦 かおり(大阪大学)/指定討論者：山口 征孝(神戸市外国語大学) 司会補佐：城 綾実</p>	<p>【ワークショップ1】 オーガナイザー：岡本 雅史(立命館大学)</p>	<p>【ワークショップ2】 オーガナイザー：小野 正樹(筑波大学)</p>	
10:20-12:00	<p>CHEN Xinren (Nanjing University) "Relative Effectiveness of Deductive and Explicit-Inductive Pragmatic Instruction: New Evidence from a Case Study"</p>	<p>会話における発話のアドレシ性 研究発表① 門田 圭祐(早稲田大学)・大山 星馬(青山学院大学[院]): アドレス行動のアノテーション 研究発表② 伝 康晴(千葉大学)・居關 友里子(国立国語研究所): アドレス行動の多様性の実証的分析 研究発表③ 高梨 克也(滋賀県立大学): アドレス行動の認知語用論的モデル化</p>	<p>日本語配慮表現研究からみた日本語教育の課題と展望 研究発表① 牧原 功(群馬大学)・李 奇楠(北京大学)・西田 光一(山口県立大学): 日本語学習者にとっての発話中の配慮理解の困難さについて 研究発表② 遠藤 李華(創価大学非常勤講師)・山岡 政紀(創価大学): 日本語形容詞「大丈夫」の文脈依存性とその理解 研究発表③ 劉 海燕(東北大学[院])・甲田直美(東北大学): 交渉談話における配慮—ビジネスコミュニケーションと日本語—</p>	

			研究発表④ 成清 萌花 (筑波大学[院])・朱 炫姝 (目白大学)・小野 正樹 (筑波大学):日本 語オンラインショッピ ングにおける依頼、受 諾、断り、交渉のコミ ュニケーションについ て	
12:00-13:00	Lunch Break			
	司会：平川 裕己 (神戸 市外国語大学[非]) 司会補佐：小松原 哲太	司会：高梨 克也 (滋賀 県立大学) 司会補佐：城 綾実	司会：小野 正樹 (筑波 大学) 司会補佐：ツオイ・エ カテリーナ	司会：鈴木 梓 (福井大 学) 司会補佐：堀内 ふみ野
13:00-13:35	SUZUKI, Toshihiko (Waseda University) & SATO, Ami (Nagoya University of Commerce & Business): The Recent Trend in the Use of English Vocatives as Familiarizers: From the Data Collected in London	梁 勝奎 (名古屋大学 [院]): 依頼の合理性 を主張する試み: 発話 を引用するやり方の事 例から	昂 燕妮 (名古屋大学 [院]): ほめる談話に おけるフェイスバラン スの調整-日本語と中国 語の初対面・友人同士 の会話をもとに-	徳淵 樹 (京都大学 [院]): アリュージョ ンに関する認知言語学 的な分析: 構文文法と 概念ブレンディング理 論の接点
13:40-14:15	KROO, Judit (Arizona State University): What is a dialect? What is a standard?: Shifting indexicality and persistent ideological norms	佐川 寛知 (神戸大学 [院]): 引用と話法の 境界線になる「情報源 への遡及可能性」につ いて	滝浦 真人 (放送大 学)・肖 婷婷 (大連外 国語大学): チャット・ コマースに見る「遠近両 用」ストラテジーと東ア ジアの語用論 -中国語 の対人距離感にいま起 こっていること-	丁 昊天 (名古屋大学 [院]): メタファー表 現の産出とコンテクス ト
(10分休憩)	司会：木本 幸憲 (兵庫 県立大学) 司会補佐：岡本 雅史	司会：伝 康晴 (千葉大 学) 司会補佐：城 綾実	司会：齊藤 信浩 (創価 大学) 司会補佐：ツオイ・エ カテリーナ	司会：鈴木 大介 (大阪 大学) 司会補佐：堀内 ふみ野

14:25-15:00	MATSUI, Kimiyo (The University of Sydney [GS]): Grammaticalization in the use of sasete itadaku by celebrities on a TV talk-show: Focusing on the development of subjectivity	西山 遥 (慶應義塾大学 [院]): 言い換えの機能と効果 –ディベートにおける意味構築–	許 明子 (名古屋大学): 日韓初対面同士の会話に見られる話題選択と会話展開について – 3カ月間の縦断調査の分析を通じて–	木原 恵美子 (神戸大学): 中上級英語学習者による会話における響鳴
15:05-15:40	ALLEN, Todd J. & LIU, Xiangdong (Kansai University): Exploring Sociopragmatic Features of Japanese Storytelling: Instances from an Izakaya	吳 凌波 (名古屋大学 [院]): 話題転換における話題開始表現の日中比較 –話題間関連性の観点から–	丁 仁京 (佐賀女子短期大学)・滝浦 真人 (放送大学)・林 炫情 (山口県立大学)・玉岡 賀津雄 (名古屋大学): 韓国語の行為指示における新しい敬意表現 – silgeyo の容認度の検討	角出 凱紀 (京都大学 [院]): カテゴリー化から見た「第2のx」
(10分休憩)	会員総会・基調講演会場@AW302			
15:50-16:10	会員総会 General Meeting of Members			
16:15-17:45	基調講演 Plenary Lecture 司会：山岡 政紀 (創価大学) / 司会補佐：堀内 ふみ野			
	野田尚史 (日本大学) 「日本語学習者による日本語の理解過程 –理解困難点と推測技術–」			
18:00~	懇親会			

【12月10日(日)】

	Room 1 [AW404]	Room 2 [AW403]	Room 3 [AW402]	Room 4 [AE351]
	司会：井出 里咲子 (筑波大学) 司会補佐：松浦 光	司会：横森 大輔 (京都大学) 司会補佐：名塩 征史	司会：畑 和樹 (東京都市大学) 司会補佐：野村 佑子	司会：有光 奈美 (東洋大学) 司会補佐：小松原 哲太
9:00-9:35	塩川 康子 (東京大学 [院]): LINE 画像広告に見る行為遂行的発話としてのスル系誘導表現とその広告コミュニケーション効果	石川 和佳 (法政大学 [非]): 結果焦点機能から見る日本語無生物主語構文: 語用論的に動機づけられる構文としての位置づけ	福本 広光 (大阪大学 [院]): 「ディスコース・ストラテジー」としての分離不定詞 ー米 国一般教書演説に含まれる用例の分析を通してー	塩田 英子 (龍谷大学): 擬態語は何を擬するの か: メタ言語表示による創造性をめぐって
9:40-10:15	黒田 一平 (京都大学ほか [非])・西村 綾夏 (フリー): 看板を「理解」するとは: 文字・表記理解に対する語用論的アプローチ	田村 心 (筑波大学 [院]): 感情表出を表す 2 タイプの命令文に関する構文文法的分析 ー 構文における語用論的内容の前景化に着目してー	鈴木 大介 (大阪大学): 発話内容を緩和する標識としての副詞 perhaps	ポスター発表@AC533 [10:00-11:30] [* 奇数番号 10:00-10:45/偶数番号 10:45-11:30] 会場担当: ツオイ・エカテリーナ
(10分休憩)	司会：尾谷 昌則 (法政大学) 司会補佐：松浦 光	司会：山本 真理 (関西学院大学) 司会補佐：名塩 征史	司会：鈴木 利彦 (早稲田大学) 司会補佐：野村 佑子	①谷口 龍子 (東京外国語大学): 日本語の自然会話における 1・2 人称主語の言語化の要因 ー 発話機能と主語の意味機能を手がかりにー ②宮永 愛子 (山口大学): 三者会話における発話の共同構築 ー 日本語とフランス語の比較を通してー ③張 琴琴 (北海道大学 [院]): 日本語教育における概数数量詞の形態音韻論 ④鈴木 梓 (福井大学): 日本語教育における現代語指導について ー SNS での「なにげに」の例からー ⑤楊 世沢 (京都大学 [院]): 中国語“给”に関
10:25-11:00	平川 裕己 (神戸市外国語大学 [非]): 空間の構造化・動物の序列化: 王子動物園の園内パンフレットの批判的談話分析	張 力丹 (北海道大学 [院]): 語用論的な観点からみる複合形式の「ことになっている」	松山 加奈子 (奈良女子大学 [院]): ジェネラルエクステンダー or something と or anything の語用論的機能 ー some と any の意味特性から ー	
11:05-11:40	西村 綾夏 (フリー): 記号の意味拡大への語用論的アプローチ: 「命がけ♡」のハートマークは何を表すのか	森 貞 (福井工業高等専門学校): 「Vされ返す」の正体 ー 「Vし返される」を阻止する語用論的要因 ー	富岡 侑央 (京都大学 [院]): 道具目的語構文から考えるヲ格の意味と機能	

			<p>する語用論的考察</p> <p>⑥楊 留 (筑波大学 [院]): 語用的装置とし ての声は何を喚起する か 一声優にまつわるメ ディア・イデオロギー の包括的モデルの構築 を目指してー</p>
11:40-13:10	Lunch Break		<p>語用論茶寮@AE351</p> <p>「海外語用論研究の動 向: IPC18 Brussels 2023 (IPrA) の参加報 告から」</p> <p>講師: 西田光一 (山口 県立大学) ほか</p> <p>進行: 小松原 哲太</p>
	シンポジウム・表彰式・閉会式会場@AB103		
	<p>シンポジウム「言語コミュニケーション能力の「評価」をめぐって」 Symposium</p> <p>司会/コメンテーター: 岡本 雅史 (立命館大学)</p>		
13:10-15:40	<p>[第1発表] 李 在鎬 (早稲田大学) 「日本語教育における評価の現状と課題」</p> <p>[第2発表] 木村 修平 (立命館大学) 「プロジェクト型英語教育における評価の難しさと可能性」</p> <p>[第3発表] 大井 学 (金沢大学) 「CCC-2 と TOPJC: 臨床的な目的のための語用能力発達評価法」</p>		
15:40-16:00	<p>大会発表賞表彰式 Best Presentation Award Ceremony</p> <p>閉会式 Closing Ceremony</p>		

12月9日(土)

【特別講義 (Special Lecture)】(10:20~12:00)

会場：Room1 (AW404)

司会：秦 かおり(大阪大学)/指定討論者：山口 征孝(神戸市外国語大学)

司会補佐：城 綾実

Relative Effectiveness of Deductive and Explicit-Inductive Pragmatic Instruction: New Evidence from a Case Study

CHEN Xinren Nanjing University, China

Abstract: This talk reports an experimental study that investigates the immediate and long-term effects of deductive instruction and explicit-inductive instruction to L2 learners on the use of the English subjunctive as a pragmatic mitigator. Two intact classes of tertiary-level Chinese EFL learners, labeled as the deductive group and the explicit-inductive group respectively, received two 45-minute sessions of pragmatic intervention, whereas a third intact class serving as the control group was given grammatical instruction. The immediate post-test and delayed post-test administered to the three groups shows that the deductive group had an immediate edge but not a long-term one over the explicit-inductive group, in terms of appropriateness and linguistic accuracy; however, the gain of the explicit-inductive group was better retained than in the deductive group. The case study not only extends the scope of instructional targets in the field of L2 pragmatics but also, more importantly, contributes to resolving the debate on the relative advantage of deductive and inductive pragmatic instruction.

Key words: pragmatic instruction; deduction; explicit induction; subjunctive

Bio-statement:

Xinren Chen is professor of English and linguistics at Nanjing University, China. He served as president of China Pragmatics Association (CPrA) during 2015-2023. He is currently (co-)editor of *Studies in Linguistics and Literature*, *East Asian Pragmatics* and *China Language Strategies*, and associate editor of *Pragmatics*. He has published extensively in Chinese as well as international journals such as *Foreign Language Teaching and Research*, *Journal of Pragmatics*, *Pragmatics*, *Lingua*, *Pragmatics and Society*, *Journal of Historical Pragmatics*, *English for Academic Purposes*, *International Journal of Applied Linguistics*, and *Acta Linguistica*. His major monographs include *The Pragmatics of Overinformativeness in Conversation* (2004), *Pragmatic Identity: How to Do Things with Words of Identity* (2018), *Critical Pragmatic Studies on Chinese Public Discourse* (Routledge, 2020), *Exploring Identity Work in Chinese Communication* (Bloomsbury, 2022), etc. He has also (co-)edited some books including *Psycho-Pragmatic Analyses of Public Discourse* (2013), *Pragmatics and Foreign Language Teaching* (2014), *Politeness Phenomena across Chinese Genres* (Equinox, 2017), *Metapragmatics and the Chinese Language*, and *East Asian Pragmatics: Commonalities and Variations* (Routledge, 2023).

【ワークショップ 1】(10:20~12:00)

会場：Room2 (AW403)

●会話における発話のアドレス性

オーガナイザー：岡本 雅史 (立命館大学)

発話を誰かに宛てる(アドレスする)ことは、会話における基本的な行為の一つである。ある発話を誰がどのように理解しどのように反応すべきかは、アドレスを通じて決定される。本ワークショップでは、

会話において発話を他者にアドレスする行動を以下の 3 つの観点から検討し、各々に関する最新の研究成果を報告することを通じて、会話における発話のアドレス性について議論する。

- (1) 会話コーパスへのアドレス行動のアノテーション
- (2) 会話コーパスに基づくアドレス行動の多様性の実証的分析
- (3) 会話におけるアドレス行動の認知語用論的モデル化

研究発表① アドレス行動のアノテーション

門田 圭祐 (早稲田大学)・大山 星馬 (青山学院大学[院])

本発表では、特定の参与者への指し示しなど、視線以外の非言語的なアドレス手段について報告し、それらによるアドレスがどのように成立しているのかを明らかにする。発話を他者にアドレスする手段としては、視線や呼びかけが代表的な手段 (Sacks et al. 1974; Lerner, 2003) として知られているが、実際の会話で他にどのような手段が使われているのかは明らかでない。そこで『日本語日常会話コーパス』に含まれるデータのアノテーションを実施したところ、言語的には呼びかけ以外にも、敬語表現や談話標識など、多様なアドレス手段が見出された。一方、非言語的な手段については、視線以外にどのような手段が使われているのか、十分に整理が進んでいない。そこで本発表では、視線以外の非言語的なアドレス手段についての事例を報告しつつ、それらがアドレス手段としてどのように機能しているのかを議論する。

参考文献：(1) Lerner, G. H. (2003). "Selecting next speaker: The context-sensitive operation of a context-free organization." *Language in Society*, 32(2), 177-201. (2) Sacks, H., Schegloff, E., and Jefferson, G. 1974. "A Simplest Systematics for the Organization of Turn Taking in Conversation." *Language*, 50, 696-735.

研究発表② アドレス行動の多様性の実証的分析

伝 康晴 (千葉大学)・居關 友里子 (国立国語研究所)

従来のコミュニケーション観では、発話は特定の発信者から特定の受信者にアドレスされることを前提としている。しかし、『日本語日常会話コーパス』などの会話コーパスを観察してみると、当て擦りを発話のアドレス先以外に向けたり、アドレス先のない独り言的な発話が発話連鎖の契機になったりする現象が観察される。発話のアドレス先とその発話がなす行為 (非難やからかい・ほめなど) のターゲットが乖離する事例は、Levinson (1988) や初鹿野・岩田 (2008) でも報告されているが、いつどのような行為でこういった技法が用いられ、どのような結果をもたらすのかについての体系的な記述はない。また、話題の始め方 (他者への質問によって話題を誘出するなど) に関する研究は多くあるが、発話連鎖の開始とアドレスとを関連づけた研究は見られない。本発表では、このようなアドレス行動の多様性について、会話コーパスの事例をもとに議論する。

参考文献：(1) 初鹿野阿れ・岩田夏穂. 2008. 「選ばれていない参加者が発話するとき—もう一人の参加者について言及すること—」『社会言語科学』10(2), 121-134. (2) Levinson, S. C. 1988. "Putting Linguistics on a Proper Footing: Explorations in Goffman's Concepts of Participation." In P. Drew and A. Wootton (eds.), *Erving Goffman: Exploring the Interaction Order*, 161-227. Cambridge: Polity Press.

研究発表③ アドレス行動の認知語用論的モデル化

高梨 克也 (滋賀県立大学)

発話のアドレス性は会話における順番交替システムの順番割り当て部が作動する三人以上の会話で特に重要になる現象であり、会話分析における受け手デザイン (Sacks et al. 1974) や Clark の聞き手デザイン (Clark and Carlson 1982) の観点からの説明がある。しかし、従来はアドレスという外から観察可能な「現象」とアドレスの選択や理解という「認知」の側面とが十分に切り分けられていなかったと考えられる。そこで、本発表では、観察可能なアドレス現象の背後にある認知メカニズム、すなわち、発信者はアドレス行動に先立ち、当該のアドレス先が適当だという認知的判断をどのように行っており、受信者は発信者のアドレス行動をトリガーとして、当該の発話の応答者として自分が適切だということをどのように認知しているか、という点について、共有知識や成員カテゴリー化などの観点からの理論化を試みる。

参考文献：(1) Sacks, H., Schegloff, E., and Jefferson, G. 1974. "A Simplest Systematics for the Organization of Turn Taking in Conversation." *Language*, 50, 696-735. (2) Clark, H. H. and

Carlson, T. B. 1982. "Hearers and Speech Acts." *Language*, 58(2), 332-373.

【ワークショップ2】(10:20~12:00)

会場：Room3 (AW402)

●日本語配慮表現研究からみた日本語教育の課題と展望

オーガナイザー：小野 正樹 (筑波大学)

日本語配慮表現とは、「対人的コミュニケーションにおいて、相手との対人関係をなるべく良好に保つことに配慮して用いられることが、一定程度以上に慣習化された言語表現」(山岡政紀編(2019))という日本語特有の発想などの特徴が強く、そのため他言語への直訳は難しいとされ、日本語教育においても学習の困難さが予想される。そこで本ワークショップでは、日本語配慮表現を、語彙・表現レベルだけではなく、ストラテジー、文脈等からの新たな解釈アプローチを取り入れ、さらに、現代の使用実態をコーパス調査から報告し、日本語非母語話者とのやりとりに有効な指針とデータ提供を行う。

参考文献

山岡政紀編(2019)『日本語配慮表現の原理と諸相』くろしお出版

研究発表① 日本語学習者にとっての発話中の配慮理解の困難さについて

牧原 功 (群馬大学)・李 奇楠 (北京大学)・西田 光一 (山口県立大学)

本発表では、日本語学習者が、発話中でポライトネスに関与している成分について、主に統語的な観点から、理解の困難度が何に影響を受けているのかを検討する。統語的レベルでは、文の冒頭に現れる「すみません」や末尾に現れる「～ようです」などの成分は理解しやすい一方、述語中の語幹に近いところに位置する成分(「本を汚してしまっただんです」「本が汚れてしまっただんです」などの語彙的ボイス、「わかりました」「わかっています」のようなアスペクト、「～と思います」「～思いました」のようなテンスなど)は、ポライトネスに関与していることを理解しにくい可能性が高い。学習者が理解しにくいポライトネスについて、言語教育に関わる者が予見可能性を持つことで、統語的・形態的および音声的な発話の正しさに加え、語用論的な発話の適切さについても指導が可能になる可能性を検討する。

研究発表② 日本語形容詞「大丈夫」の文脈依存性とその理解

遠藤 李華 (創価大学[非])・山岡 政紀 (創価大学)

日本語「大丈夫」は文脈依存性の高い形容詞である。遠藤(2019)では、「大丈夫」は文脈上の何らかの心配要素を打ち消す機能を有し、単独では語義が決定しない形容詞であり、その特性から専ら配慮表現として使用されると述べた。例えば、(1)A「5000円貸してもらえますでしょうか」B「大丈夫です」では承諾となり、(2)A「5000円貸してあげましょうか」B「大丈夫です」では断りとなるが、(1)ではAから見て借用可能性が心配要素であるためにBの「大丈夫」はそれを打ち消す貸与の承諾の意となり、(2)ではAから見たBの金銭状況が心配要素であるからBの「大丈夫」はそれを打ち消して貸与の断りの意となる。こうした「大丈夫」の文脈依存性は母語話者にとっては直観的に理解できるが日本語学習者にとっては決して容易ではなく、誤用を誘引しやすいことが知られている。本発表ではその実態を考察し、指導法について提案する。

参考文献

遠藤李華(2019)『「大丈夫」のコミュニケーション上の特質—語用論の観点からの分析—』『日本語コミュニケーション研究論集』第8号, 77-87

研究発表③ 交渉談話における配慮—ビジネスコミュニケーションと日本語—

劉 海燕 (東北大学[院])・甲田 直美 (東北大学)

ビジネスコミュニケーションを念頭においた日本語教育の必要性は、広く認識される場所である。本発表では、日本人母語話者による値下げ交渉談話データをもとに、交渉の進行と具体的表現との対応を考察する。多く用いられる配慮表現として、「～のほう」「よろしかったでしょうか」「こちら」「など」「～でしたら」「という形になります」など、なかには従来の規範概念では問題とされる用法が多用されている。これらは直接性を避け、間接的に示すことで、丁寧さを狙っている。しかしながら、ビジネスにおいては、間接的に示す一方で、自らの主張の達成を図ることも同時に行われる。興味深いのは、交渉を成功させるために、直接的な限定表現（例：今回限りのポイント付与）を用いるとともに、ぼかし表現もところどころ見られる点である。日本人母語話者に頻繁に見られたストラテジーを示すことで交渉談話の特質を検討する。

研究発表④ 日本語オンラインショッピングにおける依頼、受諾、断り、交渉のコミュニケーションについて

成清 萌花 (筑波大学[院])・朱 炫姝 (目白大学)・小野 正樹 (筑波大学)

日本語依頼表現とその受諾や断りはある程度固定化していることが報告されている。一方で日本語学習者は教科書を離れて、日本語と接することも増えている。固定化という傾向はあっても、発話の目的や話者の意図から新たな表現が生まれているのも事実である。そこで、本発表では、オンラインショッピングコーパス「メルカリ」（国立情報学研究所）を対象として、依頼、受諾、断り、交渉に見られる前置き表現、文末表現、人称表現、副詞句などを分析し、ネット上のコミュニケーションの実態を明らかにする。どのような依頼、受諾、断り、交渉表現が表れているかのバリエーションを報告し、ネットに見られる独自の定型表現方法と、その表現の配慮表現としての依頼、受諾、断り、交渉のメカニズムを説明することで、日本語学習者にも利用が増加している SNS 上の日本語コミュニケーションにも有効な日本語教育への指針とデータ提供を行う。

□頭発表(13:00~15:40)

会場：Room1 (AW404)

1-①②司会：平川 裕己 (神戸市外国語大学[非])

司会補佐：小松原 哲太

1-①13:00~13:35

The Recent Trend in the Use of English Vocatives as Familiarizers: From the Data Collected in London

SUZUKI, Toshihiko (Waseda University) & SATO, Ami (Nagoya University of Commerce & Business)

This paper focuses on the third function of vocatives classified by Leech (2014), “to establish and/or maintain a social relationship with *H*” and analyses the vocatives in our data regarding eight speech events, collected in London from 2017 to 2019.

The results of our research with 50 informants living in and near London who spoke English as their first language show that the use of Familiarizers was remarkably higher (59%) than other types of vocatives (cf. Biber *et al.*, 1999). This supports the following claim: The increase of using familiar vocatives in English indicates the decline in *bivalent politeness* or movement from polite/respect to familiarity in English (Leech 2014).

We will then talk about the use of *mate* as it was dominant (68%) in Familiarizers. We are going to demonstrate how *mate* was used and what functions it has in relation to *bivalent politeness* and *trivalent politeness* (Leech 2014).

References: (1) Leech, G. 2014. *The Pragmatics of Politeness*. Oxford/New York: Oxford University Press. (2) Biber, D., Johansson, S., Leech, G., Conrad, S., & Finegan, E. 1999. *Longman Grammar of*

spoken and written English. London: Longman.

1-②13:40~13:35

What is a dialect? What is a standard?: Shifting indexicality and persistent ideological norms

KROO Judit (Arizona State University)

This paper considers the intra-interactional reframing of enregistered (i.e., place-linked) linguistic styles. Employing a discourse analytic approach, it employs data from a corpus of casual interactions between university students in the greater Tokyo metropolitan area who self-identify as ‘Okinawan’. In the data speakers intra-interactionally negotiate the meaning of ‘Okinawa dialect’ in terms of other speaking styles, including *hyoojungo* ‘standard language’ and *chuuritsugo* ‘neutral language’. The speaking styles of Okinawa Prefecture are of particular interest since the category of *Okinawa hoogen* ‘Okinawa dialect’ is itself an enregistered construct, eliding the diversity of speaking styles in Okinawa prefecture and their history as a distinct language (Heinrich 2012). The results of this study demonstrate how speakers (re)-frame the meaning of interactionally salient linguistic categories contrastively to justify extant perceptions of ‘good’ and ‘bad’ speech. It also points to these speakers’ repurposing of conservative ideological schema to interpret enregistered styles.

References: (1) Heinrich, P. 2012. *The Making of Monolingual Japan: Language Ideology and Japanese Modernity*. Multilingual Matters. (2) Johnstone, B. 2016. “Enregisterment: How linguistic items become linked with ways of speaking.” *Language and Linguistics Compass*.

1-③④木本 幸憲 (兵庫県立大学)

司会補佐：岡本 雅史

1-③14:25~15:00

Grammaticalization in the use of *sasete itadaku* by celebrities on a TV talk-show: Focusing on the development of subjectivity.

MATSUI, Kimiyo (The University of Sydney [GS])

This presentation focuses on examining the development of subjectivity in the causative-benefactive construction, *-(s)ase-te itadak-u*, employing grammaticalization theory. The construction’s original meaning is that one humbly receives permission from a specific respected party to do something beneficial to oneself. Most previous studies claim that both the causative and benefactive components have weakened in various expanded uses that they identify. The prominent use of the construction in this study exhibits two key phenomena: 1. generalization in the meanings of permission and the causer/benefactor, and 2. semantic persistence in the meaning of benefit. These have enabled the grammaticalized meaning that the speakers do something good for themselves, which is/becomes possible through the context they are in. This study argues that facilitation of the speaker’s action is primarily attributed to unspecified situational factors (circumstantial possibilities) that are entirely subjective to the speakers, rather than to a specific referent as in the original meaning.

References: (1) Akane, Y. (2002). ‘(Sa)seteitadaku’ ni tsuite [About *-(sa)seteitadaku*]. *Kōza nihongo kyōiku*, 38, 28–52. (2) Hopper, P. J., and Traugott, E. C. (2003). *Grammaticalization* (2nd ed.). Cambridge: Cambridge University Press.

1-④15:05~15:40

Exploring Sociopragmatic Features of Japanese Storytelling: Instances from an Izakaya

ALLEN, Todd J. (Kansai University) & LIU, Xiangdong (Kansai University)

Izakayas (‘taverns’) are ubiquitous in Japan; however, few studies have investigated the sociopragmatic activities in these spaces (Futamura & Sugiyama, 2018). Thus, in this study, we sociopragmatically examined storytelling sequences in the drama series *Shinya Shokudō* (‘Midnight Diner’) from micro, meso, and macro perspectives (Haugh et al., 2021). From a micro perspective, we found both forms of normative (e.g., discourse particles initiating storytelling sequences) and

creative language use (e.g., idiosyncratic vocabulary and voice quality variation). From a meso perspective, the izakaya context permits speakers to perform in unique and situated ways where normative sociolinguistic behaviours are often suspended. Lastly, the macro analysis revealed cultural ideologies surrounding social class during storytelling sequences (e.g., Yamanote v. Shitamachi). Overall, the study contributes to a deeper understanding of the interplay of normative and creative language use and highlights the unique sociopragmatic behaviours that emerge in this context during storytelling sequences.

References: (1) Haugh, M., Kádár, D. Z., & Terkourafi, M. 2021. *The Cambridge Handbook of Sociopragmatics*. Cambridge. (2) Futamura, T., & Sugiyama, K. 2018. The dark side of the nightscape: the growth of izakaya chains and the changing landscapes of evening eateries in Japanese cities. *Food, Culture & Society*.

□頭発表(13:00~15:40)

会場：Room2 (AW403)

2-①②司会：高梨 克也 (滋賀県立大学)
司会補佐：城 綾実

2-①13:00~13:35

依頼の合理性を主張する試み：発話を引用するやり方の事例から

梁 勝奎 (名古屋大学[院])・畑 和樹 (東京都市大学)・山本 真理 (関西学院大学)

話し手が相手に何かをさせる際に、話し手と他者(第3者)が過去に交わした発話を引用する現象が見られる。本研究では特に依頼の過程で為される「第3者との過去の発話の引用」に注目し、会話分析の方法を用いて分析を行う。相手に何かを頼むとき、前置きや依頼発話の後の機会を利用して、話者自身がなぜこの依頼行為を行うのかについての理由説明を行うことがある。本研究で注目する「第3者との過去の発話の引用」は、依頼内容を示すと同時にその依頼が話者だけの責任においてなされているのではなく、第3者が(または第3者も)求めていることを示すことで理由付けを行うことが可能になる。それにより、なぜ今この形式で受け手にそれを頼むのか、つまりこの依頼の合理性を示すことができる。さらに、「第3者との過去の発話の引用」は非明示的に依頼の達成可能性を確認する手立てにもなると考えられる。

2-②13:40~14:15

引用と話法の境界線になる「情報源への遡及可能性」について

佐川 寛知 (神戸大学[院])

「誠は私が正しいなと思った」のような「引用句+ト/ッテ」という形式の文は「引用構文」(藤田 2000)と呼ばれ、引用句における元発話の再現度の程度差の違いで「直接/間接話法」に区別されることがある。ところが、本来異なるレベルの話であるはずの直接/間接引用かといった引用の仕方における正確性の問題と、引用句内のモダリティの有無に基づいた区別である話法は混用されることが多く、元発話に対する変容の有無が話法の区別のように論じられてきた。そこで本研究では、引用句の聞き手が具体的な元発話に接近できるか否かが確認できて初めて引用文の分析が可能になるという前提、すなわち「情報源への遡及可能性」の確認が引用文の分析に必須であることを主張し、実際に幾つかの例と照らし合わせながら、遡及可能か否かで引用の語用論的機能の違いが生じていることを示す。

参考文献：藤田保幸 (2000)『国語引用構文の研究』和泉書院。

2-③④司会：伝 康晴 (千葉大学)
司会補佐：城 綾実

2-③14:25~15:00

言い換えの機能と効果 —ディベートにおける意味構築—

西山 遥 (慶應義塾大学[院])

本発表では、大学生の国際ディベート大会でのシークエンスを利用した反論戦略の機能と効果を明らかにすることを目的とする。具体的には、「相手の発言(“XX”)を引用(例：“He said XX”)し言い換える(例：“That means YY.”)シークエンス」を対象に、元の話し手の発言に対し論破しやすい新たな意味づけを行い、元の内容を展開・拡張する方法を分析・考察する。従来主流な修辞研究が単独発話の効

果を対象としてきたのに対し、本研究は言い換えを起点とする談話のダイナミクスに着目する。方法論にはオケーションの意味論を採用し、相手の発言に対してシークエンス内の複数の発話・言い換えがとる意味関係（抽象度や並列・因果・前後の関係）を図式化した。

その結果、元の発言内容に対し、因果関係上の展開や意味内容の具体的な掘り下げ、反例の提示などが行われ、都合良く効率的に相手の主張や想定の不十分さ、不適切さを聴衆に示していると判明した。

参考文献：(1) Bilmes, J. 2009. “Taxonomies are for Talking: Reanalyzing a Sacks Classic.” *Journal of Pragmatics*, 41(8), 1600-1610. (2) 林礼子. 2022. 「コミュニケーション学から見た意味研究の課題と展望-オケーションの意味論のアプローチ-」 *KLS Selected Papers: Selected Papers from the 46th Meeting of The Kansai Linguistic Society*, 4, 145-163.

2-④15:05~15:40

話題転換における話題開始表現の日中比較 —話題間関連性の観点から—

呉 凌波 (名古屋大学[院])

本稿は中国人日本語学習者の話題転換が唐突で押し付けが強いと感じられる原因を探るため、日本語と中国語の初対面会話を収集し、比較した。両言語における話題転換のタイプを分けたいうえで、転換タイプごとに使用される話題開始表現の出現傾向を量的に調べた。その結果、新出型と派生型はもともと出現数が多いが、中国語での派生型は、会話の焦点はより非線形に推移する。また、日本語と比べて中国語では再出型と復帰型がより多く出現している。話題開始表現の全体的な使用傾向として、日本語話者は認識変化表現、言い淀み表現、話題を際立たせる表現を多く使用する一方、中国語話者は関連性表示表現を多く使用するが、話題開始表現の不使用も多い。中国語では日本語以上に、特定の話題または相手への深い関与が期待され、かつ単一な話題開始表現が使用される。このような特徴は、接触場面において相手に負担をかける可能性がある。

□頭発表 (13:00~15:40)

会場：Room3 (AW402)

3-①②司会：小野 正樹 (筑波大学)

司会補佐：ツオイ・エカテリーナ

3-①13:00~13:35

ほめる談話におけるフェイスバランスの調整—日本語と中国語の初対面・友人同士の会話をもとに—

昂 燕妮 (名古屋大学[院])

会話参与者双方のフェイス均衡は、円滑なコミュニケーションや良好な対人関係を維持する上で重要である。「ほめ」は、受け手を高く評価してフェイスを充足させる行為である。「ほめ」によって受け手のフェイスが充足され、ほめ手との間にフェイスの不均衡を生み出すため、それに対するフェイスバランス調整行動が必要だと思われる。本研究では、日中の初対面・友人同士によるほめる談話をもとに、会話参与者は自己と相手のフェイスバランスをどのように調整しているかを分析した。

その結果、全体的に見ると、いずれの会話場面においても、会話参与者双方は頻繁にマイクロな調整を行うことで、自分と相手のフェイスのバランスを維持していた。

一方で、日本語の友人会話では、不均衡が生じたら即時に調整する傾向が強かった。それに対して、中国語の友人会話では、一時的に不均衡が生じても許容され、話者はよりマクロなレベルからフェイスバランスを調整していた。

3-②13:40~14:15

チャット・コマースに見る“遠近両用”ストラテジーと東アジアの語用論 —中国語の対人距離感にいま起こっていること—

滝浦 真人 (放送大学)・肖 婷婷 (大連外国語大学)

現代中国の呼称で選好される距離感と背景要因を、拡大を続けるチャット・コマースに探った。長らく「你(ni3)」が用いられてきた中国で、80年代に敬称「您(nin2)」が登場し普及する中、急拡大するEコマースのチャットから新奇な親称「亲(qin1)」が登場した。遠隔化的シフトの上に近接化的シフトが被さるようなこの現象を解釈すべく、チャット・コマースの実態調査に加え、多変量的に構成したダミー・チャットの印象評定調査を行った。その結果、実態では近→遠の混合型呼称が多いのに対し、人々の選好は

第一に遠隔的呼称だった。選好に影響する第二の要因は居住地で、北は遠隔好み、南は近接好みだった。実態ではこれに“ダサイ恋話”的なアクセントが加わり、印象調査でも高い評価だった。結論的に、近→遠のスタイルは、顧客の居住地に関わらず対応でき、買い物への関心を引きつつ、顧客への丁寧さも担保する“遠近両用”の高度なストラテジーと推察された。

主な参考文献：

Chen, X. R. 2019. “Family-culture’ and Chinese Politeness: An Emancipatory Pragmatic Account.” *Acta Linguistica Academica*, 66(2), 251–270.

Gu, Y. G. 1990. “Politeness Phenomena in Modern Chinese.” *Journal of Pragmatics*, 14, 237–257.

3—③④司会：斉藤 信浩 (創価大学)

司会補佐：ツオイ・エカテリーナ

3—③14:25~15:00

日韓初対面同士の会話に見られる話題選択と会話展開について —3カ月間の縦断調査の分析を通じて—
許 明子 (名古屋大学)・呉 凌波 (名古屋大学[院])

本研究では日韓初対面同士4組を対象に、3カ月間にわたり1カ月に1回、会話調査を実施し分析を行った。三牧(2013)の雑談での話題の定義に従って話題を認定し、筒井(2012)による話題内容の質的異なりを判断基準として導入し話題を区切る手続きを行った。会話全体の話題を時間の流れで可視化し、会話展開に差異が見られた2組の会話データの分析を行った。その結果、両ペアとも1回目の会話より2回目以降の会話において大話題数が減少し、大話題から中話題、小話題への階層をなして派生する会話展開が観察された。一方、話題間の結束性の点では差異が見られ、ペア①は一つの大話題の会話が長く続いており、話題間の結束性が強く、話題間に連鎖が見られたのに対して、ペア②は大話題から中話題・小話題へと派生関係が少なく話題間の結束性が弱いことから新出話題の選択が多く見られた。話題選択と話題間の結束性が会話展開に影響を与えている点を明らかにする。

参考文献：(1)筒井佐代. 2012.『雑談の構造分析』.くろしお出版.(2)三牧陽子. 2013.『ポライトネスの談話分析』.くろしお出版.

3—④15:05~15:40

韓国語の行為指示における新しい敬意表現-silgeyoの容認度の検討

丁 仁京 (佐賀女子短期大学)・滝浦 真人 (放送大学)・林 炫情 (山口県立大学)・
玉岡 賀津雄 (名古屋大学)

現代韓国語の行為指示における新しい敬意表現-silgeyoがどの程度受け入れられているかを検証した。ソウル・京畿道在住の韓国語母語話者70名を対象に、-silgeyoの容認度をリッカート尺度で判断してもらった。t検定の結果、15場面のうち11場面において従来の行為指示表現-seyoのほうが容認度が高かった。4場面では有意な違いはなかった。さらに、2つの行為指示表現の平均からクラスタ分析を行った。その結果、-silgeyoの容認度の違いによって、クラスタⅠからⅢの3つに分かれた。特に、クラスタⅠは新しい行為指示表現として受け入れられていることがわかった。本調査の結果は、新しい二人称的行為指示表現-silgeyoは、サービス業的文脈において顧客的立場の相手に動作や行為をさせようとする際のフェイス侵害に対する一種の補償として、相手の意思によって動作や行為がなされるかのように、敬語付きの丁寧な意思形で表されるものであると考えられる。

参考文献：(1)丁仁京. 2021. 「韓国語の行為指示表現-실게요(silgeyo)’に関する研究」『福岡大学研究部論集A：人文科学編』21-2. 21-28. (2)滝浦真人. 2022. 「敬意漸減—すり減って止まらない敬意が引き起こすこと—」. 椎名美智・滝浦真人(編). 『させていただく大研究』95-115. 東京.

□頭発表 (13:00~15:40)

会場：Room4 (AC531)

4—①②司会：鈴木 梓 (福井大学)

司会補佐：堀内 心み野

4—①13:00~13:35

アリュージョンに関する認知言語学的な分析：構文文法と概念ブレンディング理論の接点

徳淵 樹 (京都大学[院])

本研究は、学術論文のタイトルにおいて度々用いられる戯曲 Hamlet の「アリュージョン」を認知

言語学的な観点から分析することによって、「構文文法理論」と「概念ブレンディング理論」との接合に関する積極的な可能性を模索するものである。結果として、当該の構文 **To X or not to X?** は、もとのテキストに内在する抽象的な機能が **X** のスロットを埋めた融合表現の意味極に投射されることで、「**X** か **X** でないか？」という単なる選択肢の提示に止まらない「焦点となるような問題の提示」という非合成的な意味を付加的に実現していることが確認された。

参考文献：(1) Fauconnier, G. and M. Turner. 2002. *The Way We Think: Conceptual Blending and the Mind's Hidden Complexities*. (2) Hoffmann, T., and A. Berg. 2018. A Construction Grammar Approach to Genre. *CogniTextes*. 18 (18).

4—②13:40~14:15

メタファー表現の産出とコンテキスト

丁 昊天 (名古屋大学[院])

本発表は Kövecses (2015、2020) によるメタファー表現産出のプロセスモデルに基づき、朝日新聞クロスサーチから抽出した〈取引は旅〉のメタファー表現を例に、メタファー表現の産出におけるコンテキストとメタファー表現の慣習性の関係を考察するものである。起点領域から目標領域への写像と定義されるメタファーの具現化がコンテキストから影響を受け、コンテキストの関与がまたメタファー表現の慣習性という要因によって制約されることを明らかにする。また、分析を通し、抽象概念を理解するために無意識的に、義務的に利用される概念メタファーの言語的実現としてのメタファー表現と修辭的效果を狙う技巧としてのメタファー表現との連続性について論じる。

参考文献：(1) Kovecses, Zoltan. 2015. *Where Metaphors Come From, Reconsidering Context in Metaphor*. Oxford and New York: Oxford University Press. (2) Kovecses, Zoltan. 2020. *Extended Conceptual Metaphor Theory*. Cambridge: Cambridge University Press.

4—③④鈴木 大介 (大阪大学)

司会補佐：堀内 心み野

4—③14:25~15:00

中上級英語学習者による会話における響鳴

木原 恵美子 (神戸大学)

本発表は、CEFR 中上級レベルの英語学習者の3人会話における響鳴 (Du Bois 2014) に着目し、CEFR 基礎レベルの英語学習者による響鳴と比較して、どのように異なるのかを示すことを目的とする。中上級レベルの学習者によるオンライン会話 (9時間 11分) を分析すると、①中上級レベルの学習者の語彙響鳴は、基礎レベルの学習者と同様に、最低限の承認を表す際に頻繁に観察された。しかし、②同じ語を繰り返す場合でも、おうむ返しのようにすぐに同一表現を繰り返すのではなく、自身のターンが来たときに他の表現と組み合わせながら、同一表現を繰り返すことも観察された。さらに、③構文レベルでの響鳴 (structural parallelism, Du Bois 2014) も頻繁に観察された。②と③は基礎レベルの学習者の会話ではほとんど観察されないため、統語的構造も含めて即座に理解して、類似の構造を速やかに再現するのが中上級学習者による響鳴と考えられる。

参考文献：(1) Du Bois, John. (2014) "Towards a Dialogic Syntax." *Cognitive Linguistics* 25(3): 359-410.

4—④15:05~15:40

カテゴリー化から見た「第2のX」

角出 凱紀 (京都大学[院])

本研究は、「第2のX」という表現についてカテゴリー化 (e.g. Langacker 1987) の観点から論じることを目的とする。通常「第2のX」によって指示されるのは、複数存在するXの指示対象の中で何らかの順序において2番目のものである (e.g. 第2の理由/第2の都市/...)。しかし、「第2の大谷翔平」「第2のツイッター」「第2のふるさと」のように、当該表現には必ずしもXが複数の指示対象を持たない事例が観察される。本研究では、

Benveniste (1948) が指摘する序数詞の「補完機能」から、これらの非構成的な「第2のX」がXをプロトタイプとするカテゴリーを新たに形成したうえで、指示対象を当該カテゴリーの拡張事例として提示するものとして分析することを提案する。その上で、「ほぼX」「立派なX」等のヘッジ表現 (Lakoff 1973) との比較を通して、当該表現の特徴について考察する。本研究は、「第3のビール」「第4の壁」といっ

た類似表現の分析にも援用可能なことが期待される。

参考文献：Benveniste, É. 1948. *Noms D' agent Et Noms D' action En Indo Européen*. Paris: Adrien Maisonneuve. / Lakoff, G. 1973. Hedges: A study in meaning criteria and the logic of fuzzy concepts. *Journal of philosophical logic* 2(4) 458 508. / Langacker, R. W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar: Volume I: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.

会員総会 General Meeting of Members (15:50~16:10)

会場：AW302

会員の方はご参加ください。

議題：本大会のテーマについて・大会発表賞の発表表彰・会長等役員の改選についてなど

基調講演 Plenary Lecture (16:15~17:45)

会場：AW302

司会：山岡 政紀 (創価大学) / 司会補佐：堀内 心み野

日本語学習者による日本語の理解過程 —理解困難点と推測技術—

野田 尚史 (日本大学)

この講演では、日本語を母語としない日本語学習者が日本語を聞いたり読んだりしてその意味を理解する過程について、(1)と(2)を中心に考察する。

(1) 理解困難点：学習者はどのような部分の聴解・読解がなぜ難しいのか？

(2) 推測技術：学習者は聴解・読解でわからない部分をどのように推測しているのか？

日本語学習者の理解課程を明らかにするために、学習者に自分が聞きたい日本語の音声を聞いてもらったり読みたい日本語の読み物を読んでもらい、それをどう理解したかを自分の母語で話してもらい調査を行った。

その結果、たとえば(3)や(4)のような理解課程が明らかになった。

(3) 学習者は、複雑な文法構造を持つ文を文法的に分析するのではなく自分が持っている背景知識から語用論的に解釈し、その文の意味を不適切に理解することがある。

(4) 学習者は、わからない部分に対して、その前後にある文法形式の機能やその前後の文脈から語用論的に解釈し、その部分の意味を適切に推測することがある。

【講師略歴】

野田 尚史 (のだ ひさし)

生まれ：1956年、金沢市

学歴：大阪外国語大学イスパニア語学科卒業、大阪外国語大学修士課程日本語学専攻修了、博士(言語学)

職歴：大阪外国語大学助手、筑波大学講師、大阪府立大学助教授・教授、国立国語研究所教授、日本大学教授

専門：日本語学、日本語教育学

(主要著書)

『「は」と「が」』(くろしお出版、1996)、『日本語の文法4 複文と談話』(共著、岩波書店、2002)、『コミュニケーションのための日本語教育文法』(編著、くろしお出版、2005)、『日本語の配慮表現の多様性—歴史的変化と地理的・社会的変異—』(共編著、くろしお出版、2014)、『日本語学習者の読解過程』(編著、ココ出版、2020) など

懇親会(18:00~)

12月10日(日曜日)

口頭発表(9:00~11:40)

会場: Room1 (AW404)

1-①②井出 里咲子(筑波大学)

司会補佐: 松浦 光

1-①9:00~9:35

LINE 画像広告に見る行為遂行的発話としてのスル系誘導表現とその広告コミュニケーション効果

塩川 康子(東京大学[院])

本発表では LINE の画像型広告に現れる「スル系誘導表現」(e. g., 「～を見る」「チェック」)を行為遂行的発話と捉え、当該表現がユーザーを遷移先ページへと誘導する仕組みを論じる。まず、スル系誘導表現はそれが広告であることをユーザーに意識させることなく、ユーザーの意識を画像外の遷移先ページへと向けさせる。また、企業側の勧誘行為を隠蔽し、「ユーザーが～スル」という意味をユーザーの意識において前景化させる働きをもつ。

参考文献: (1) Kress, G and Leeuwen, T. V. 1996. *Reading Images: The Grammar of Visual Design*. London, New York: Routledge. (2) Searle, J. R. 1989. "How Performatives Work." *Linguistics and Philosophy* 12(5), 535 - 558. (3) 辻 大介. 1998. 「言語行為としての広告—その逆説的性格—」、『マス・コミュニケーション研究』52、104-117.

1-②9:40~10:15

看板を「理解」するとは: 文字・表記理解に対する語用論的アプローチ

黒田 一平(京都大学ほか[非])・西村 綾夏(フリー)

本研究では、景観言語(特に広義の看板)における文字・表記理解について論じる。ロング(2014)は個別の看板について、語用論的に理解の難しい例を取り上げている。しかし、ここで問題にされているのは、文字自体は読めるものの看板の意図が分からない事例であり、そもそも読解できない(難しい)デザイン性の高い文字・表記は射程の範囲外となっている。そこで筆者らは、街中で渉猟した約300点の看板を、単独では「読めない(読みづらい)」理由ごとに分類したうえで、それらが「読める」ための条件と方略を考察した。そしてこの種の「読めない」看板は、(i) 看板の配置や周囲の建物、立地などがテキスト外の文脈となって店名としての理解を助けていること、(ii) 可読性を犠牲にしながらも特殊な表現を行うことで、おしゃれ感、高級感や本格感を演出しており、文字の表象性(染谷2019)を強く発揮していること、の2点を指摘した。

参考文献: (1) ロング ダニエル. 2014. 「非母語話者からみた日本語の看板の語用論的問題: 日本語教育における「言語景観」の応用」、『人文学報』488、1-22. (2) 染谷 裕子. 2019. 「『見ことば』としての看板の文字: 文字種の機能との関わり」、『文体論研究』65、93-104.

1-③④司会: 尾谷 昌則(法政大学)

司会補佐: 松浦 光

1-③10:25~11:00

空間の構造化・動物の序列化: 王子動物園の園内パンフレットの批判的談話分析

平川 裕己(神戸市外国語大学[非])

本論は、動物園の園内マップが園内空間を構造化し飼育動物を序列化する機能を果たすことを、批判的談話分析の観点(Fairclough 2012)から主張する。地図という媒体には、ある範囲の地理や地形を正確に写しとる客観性のみでなく、閲覧者に一定の世界観を提示するイデオロギ性も認められる(若林2005)。本論で扱う神戸市立王子動物園の園内マップの場合、彩色によって園内を複数の領域に分割

し、園内空間の構造的な把握を促す。また、エリア名の設定や飼育動物のアイコン表示をつうじて、動物たちを一定の序列のもとで眺めるよう要請する。こうした構造・序列はいずれも園内空間や飼育動物それ自体の特性ではなく、マップ上の表示がもたらすものである。この意味で、園内マップは動物園という場の眺め方を指定するイデオロギの装置となっている。本論では、王子動物園のマップについて得られた知見をもとに、同種の地図の分析可能性についても議論する。

参考文献：(1) Fairclough, N. 2012. "Critical discourse analysis." In J. P. Gee and M. Handford (eds.) *The Routledge Handbook of Discourse Analysis*, 9-20. London and New York: Routledge. (2) 若林幹夫. 2005. 「思想としての地図：あるいは、「知の地政学」へ」 水内俊雄(編) 『シリーズ〈人文地理学〉4 空間の政治地理』 132-155. 東京：朝倉書店。

1-④11:05~11:40

記号の意味拡大への語用論的アプローチ：「命がけ♡」のハートマークは何を表すのか

西村 綾夏 (フリー)

本研究ではハートマーク (HM) の拡張的な用法について女性ファッション雑誌をもとに論じ、以下を指摘する。(1) HMの有無は、雑誌の対象年齢や属性と相関がみられる。(2) 同じ紙面上でも「恋愛」文脈だけには手書き風が用いられるなど、扱う話題によって異なる形態のHMが使い分けられる。(3) HMは断定的な表現に付され、話し言葉において「笑い」が担う役割(早川 2000)と同様、感情の共有や厚かましさを軽減という効果を担う。以上3点からは、HMが従来の文脈である「恋愛」(関沢 2013)を超えて「共感」にまで意味を拡張した結果、表す意味を形態面で区別していることが見てとれる。モダリティ表現による対人配慮がみられる点は話し言葉とも共通するが、機能の異なりを視覚的表現によって区別する用法は、従来あまり重視されてこなかった書き言葉特有の現象であり、本研究によって新たに得られた知見である。

参考文献：(1) 早川治子. 2000. 「相互行為としての『笑い』：自・他の領域に注目して」、『文学部紀要』14(1)、23-43。(2) 関沢英彦. 2013. 「記号としての心臓：なぜ、血液のポンプが、愛の象徴になったのか?」、『コミュニケーション科学』37、49-79。

□頭発表 (9:00~11:40)

会場：Room2 (AW403)

2-①②司会：横森 大輔 (京都大学)

司会補佐：名塩 征史

2-①9:00~9:35

結果焦点機能から見る日本語無生物主語構文：語用論的に動機づけられる構文としての位置づけ

石川 和佳 (法政大学[非])

一般的に、英語の場合とは異なり、日本語の無生物主語構文を単文で判断すると不自然になることが知られている(西村 (1998))。斎藤 (2001)は英語と日本語の無生物主語構文を結果焦点の観点から分析し、後者の場合、「てくれる」授与構文表現を付加すると容認度が上がる事実も分析対象とする。独立した研究として熊 (2009)は、小説や新聞社説などの環境下では日本語の無生物主語構文が多く使用される事実を指摘し、石川 (2022)は、書き言葉で容認される場合にも結果焦点の要因が密接に関わることを明らかにする。本発表では、結果焦点機能を軸に、単文の場合と書き言葉の場合とで使用される日本語無生物主語構文の振る舞いを整理することで、当該構文の特徴が、Osawa (2009)で提案された「語用論的に動機づけられる構文 (Pragmatically Motivated Constructions)」の一般的特徴 (Ishikawa (2022))と合致することを示す。この試みは、構文間の共通性を整理することにもつながり、傍証として様態動詞と着点を表す「に」句表現の組み合わせも扱う。

参考文献：(1) 斎藤伸治. 2001. 「無生物主語構文について」、『アルテス リベラレス』第68号、83-93、岩手大学。(2) Osawa, Mai. 2009. *A Unified Approach to Pragmatically Licensed Constructions in English*, Doctoral dissertation, University of Tsukuba.

2-②9:40~10:15

感情表出を表す2タイプの命令文に関する構文文法的分析 一構文における語用論的内容の前景化に着

田村 心 (筑波大学[院])

本発表の目的は、Tell me about it や Look at you などの命令文が字義通りの命令・要求ではなく、皮肉や驚きなどといった話者の感情を表出する事実に関して、今井 (2001)による命令文の定義と構文文法理論の観点から説明を与えることである。具体的には、Cappelle and Depraetere (2016)や Cappelle (2017)などで提案されている“short-circuited interpretation”の分析を発展させ、命令文自体は潜在的な内容(話者が希求する事態)を表すが、実際に話者が直面している事態がその内容とは真逆・予想外なものであるため、その際に抱く感情が際立つことで、当該命令文は話者の感情表出を間接的に伝達できる構文であると主張する。さらに、この分析を踏まえ、感情を表出する命令文には、まず話者の感情を表すことで、新たな話題を導入するタイプと、ある言動に対する反応として、話者の感情を表すタイプに分類可能であることを示す。

参考文献：(1) 今井邦彦. 2001. 『語用論への招待』. 東京：大修館書店. (2) Cappelle, B. and I. Depraetere. 2016. “Short-circuited Interpretations of Modal Verb Constructions: Some Evidence from The Simpsons.” *Constructions and Frames* 8. 7-39.

2-③④司会：山本 真理 (関西学院大学)

司会補佐：名塩 征史

2-③10:25~11:00

語用論的な観点からみる複合形式の「ことになっている」

張 力丹 (北海道大学[院])

本発表は、日常会話に用いられると、構文的意味のみ産出されず、推意を引き出せることがあるため行為要求や責任回避のような語用論的意味も読み取れる「ことになっている」の文を、加藤 (2017) で提案された構文推意の観点から考察するものである。具体的には、推意の強さによって段階的な移行域をなしている構文推意において、構文推意のトリガーとしての「ことになっている」から引き出される構文推意は、容易に取消できるため弱い推意である点を明らかにする。

参考文献：加藤重広. 2017. 「構文推意の成立と拡張：日本語の助動詞構文を主な例にして」、天野みどり・早瀬尚子 (編) 『構文の意味と拡がり』、119-140、くろしお出版。

2-④11:05~11:40

「Vされ返す」の正体 - 「Vし返される」を阻止する語用論的要因-

森 貞 (福井工業高等専門学校)

複合動詞(V1+V2)においてV2が「返す」の場合、V1は通常、受動化されない。というのも、(V1受動形+V2能動形)の場合、trajector付与先の不一致(の意識)が生じるからである。(V1能動形+V2受動形)の場合は、そのような不一致は意識されない。しかし、インターネットで検索してみると、(外見上)V1受動形の実例が多数ヒットする。本発表では、実例の分析や、言語感覚調査の結果を基に、「Vされ返す」は「Vし返す」のV1が受動化されたものではなく、「Vする」を受動化する際に【行為Aに対する同様の行為A'による反応】であることを強調しようとする意識が伴った場合に生じるものであると結論づける(この考え方であれば、trajector付与先の不一致の意識は生じ得ない)。また、語用論的に、「Vし返す」という言い方が不適切な場合(例:「ケアし返す」)があり、その場合には、「Vし返される」も不適切となり、結果的に、「Vされ返す」が選好される。

参考文献：(1) 影山太郎. 1993. 『文法と語形成』ひつじ書房. (2) Langacker, Ronald W. 2009. *Investigations in Cognitive Grammar*, Berlin/New York: Mouton de Gruyter. (3) 柴谷方良. 1978. 『日本語の分析』大修館書店. (4) 杉村 泰. 2006. 「本動詞『返す』と複合動詞『一返す』の意味の対応について」『ことばの科学』19, 157-165.

□頭発表 (9:00~11:40)

会場：Room3 (AW402)

3-①②司会：畑 和樹 (東京都市大学)

司会補佐：野村 佑子

3-①9:00~9:35

「ディスコース・ストラテジー」としての分離不定詞 —米国一般教書演説に含まれる用例の分析を通して—

福本 広光 (大阪大学[院])

本研究は、米国大統領による一般教書演説に含まれる分離不定詞 (split infinitive) の語用論的効果について考察するものである。当構造は伝統的に規範から逸脱した語法と見なされることがあるが、演説において特定の「ディスコース・ストラテジー」として機能することが示唆されている。調査にあたっては約 230 年分の一般教書演説のデータを用い、抽出された分離不定詞を含む用例に対して「プロソディ」および「意味・談話語用論」の観点から効果の分析を行った。分析の結果として、本発表では以下の3点を論じる：1) 英語の自然なリズムを整えて聴衆に印象付ける、2) 人間のゲシュタルト的理解に対応した語順にして正確・適切に意味を伝達する、3) 副詞の位置を変えて文末焦点 (end focus) を避けることによりニュアンスの歪曲を回避する。これらの要因から、分離不定詞は演説という媒体の中で強力な修辞技法として作用することを示す。

参考文献：(1) Crystal, D. 2003. *The Cambridge Encyclopedia of the English Language*, 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press. (2) 福本広光. 2022. 「米国一般教書演説に出現する分離不定詞の効果に関する予備的研究」『英語コーパス学会大会予稿集 2022』55-60. (3) Ungerer, F. and H.-J. Schmid. 2006. *An Introduction to Cognitive Linguistics*, 2nd ed. Routledge.

3—②9:40~10:15

発話内容を緩和する標識としての副詞 perhaps

鈴木 大介 (大阪大学)

本研究では、ICE-GB および BNC から得られたデータを分析することにより、英語副詞の機能とその拡張について考察を行う。具体的には、副詞の *perhaps* を扱い、その類義表現である *maybe* と比較することで、特定の生起環境における *perhaps* の働きを記述する。ここでは特に、(i)比較表現に対する緩和表現として、および(ii)疑問文等の文末において発話内容を緩和する表現としての *perhaps* に着目し、様々な生起文脈における用法の記述を行うと同時に、従来の意味と本研究での機能 (の拡張) との関係性を議論する。結果として、*perhaps* というモダリティ表現において、命題に対する低い可能性を示すという意味、つまり、蓋然性を下げる (弱める) という機能から、発話内容を弱めるという機能に拡張されていることが確認できた。現代において片方の表現が機能を拡張させているという点はモダリティ全体の体系とその変容を考える上で重要な事実である。

参考文献：

(1) Bellert, Irena. 1977. On semantic and distributional properties of sentential adverbs. *Linguistic Inquiry* 8(2), 337–351. (2) Doherty, Monika. 1987. Perhaps. *Folia Linguistica* 21(1), 45–65. (3) Hoyer, Leo. 1997. *Adverbs and Modality in English*. London: Longman.

3—③④司会：鈴木 利彦 (早稲田大学)

司会補佐：野村 佑子

3—③10:25~11:00

ジェネラルエクステンダー or something と or anything の語用論的機能 — some と any の意味特性から —

松山 加奈子 (奈良女子大学[院])

本発表は、口語表現群であるジェネラルエクステンダーに含まれる *or something* と *or anything* の語用論的機能の違いを検討する。両表現はどちらもヘッジ表現と分析されている。例えば、*a coffee or something / or anything* はどちらも「コーヒーか何か」と訳出される。しかし、「ビールか何か飲みにいかない？」と言うときの誘いの文脈では、*A beer or something?* が使われることが多く、*or anything* は使われにくい。先行研究ではこのような違いが詳しく述べられていない。そこで本発表では、両表現の違いを、*some* と *any* の意味特性に関連付けて説明する。具体的には、Bolinger (1977) による *some* の「既定の事実が仮定される」性質と、Horn(2000a)(2000b)(2005)の、NPI *any* と FC *any* の統一的分析を基に、両表現の語用論的機能の違いを明らかにする。

参考文献：(1) Overstreet, Maryann and George Yule (2021) *General Extenders*, Cambridge University Press, Cambridge.

3—④11:05~11:40

道具目的語構文から考えるヲ格の意味と機能

富岡 侑央 (京都大学[院])

本研究の目的は道具目的語構文の容認性を予測するための条件について認知言語学の観点から考察することである。例えば「ハサミで何かを切る」という意味で「ハサミを切る」という表現が使われることがある。このように通常はデ格を伴って現れるような道具名詞 がヲ格を伴って現れるような構文を道具目的語構文という。しかし全ての道具名詞でこうした交替が可能なわけではなく、例えば「洗剤で何かを洗う」という意味で「*洗剤を洗う」と言うことはできない。また道具目的語構文は「ハサミを切る音」のような連体修飾節内で容認されやすいことが知られている。本研究では、名詞の「道具らしさ」と文における情報価値が道具目的語構文の容認性を上げていることを主張する。また道具目的語構文とメトニミーとの興味深い類似点についても考察する。

参考文献：足立公平. 2004. 「ヲ格と道具目的語」『認知言語学論考 3』147-181. 東京:ひつじ書房.

□頭発表 (9:00~9:35)

会場：Room4 (AE351)

4—①司会：有光 奈美 (東洋大学)

司会補佐：小松原 哲太

4—①9:00~9:35

擬態語は何を擬するのか：メタ言語表示による創造性をめぐって

塩田 英子 (龍谷大学)

本発表ではメタ表示の観点から擬態語を再定義する。従来、擬態語は「音のない対象をそれらしい音に擬えたもの」や「状態をそれらしい音でうつしたことば」であると定義されてきた。また、擬音語との区別の難しさから、擬音語と擬態語をまとめてオノマトペに分類することも多い。しかし、それぞれの表現対象に音の有無という相違がある以上、その区別は明確になされる必要がある。本発表ではメタ表示による分類を取り入れれば擬音語と擬態語の区別は可能であり、これまで曖昧にされてきた擬態語の定義を明確にすることができると提案する。まず従来の定義の問題点を指摘したうえで、発表者による先行研究に基づき、擬態語をメタ言語表示に位置づける。そうすることで、擬音語や動詞、慣用表現を語源とする擬態語の存在が説明できること、擬音語よりも擬態語の数が多くなる理由が明らかになること、擬音語よりも擬態語のほうが創造性に富む根拠が得られることを示す。

参考文献：(1) Wilson, D. 2000. “Metarepresentation in Linguistic Communication.” In D. Sperber (ed) *Metarepresentations: a Multidisciplinary Perspective*, 411-448. New York: Oxford UP. (2) Blakemore, D. 2007. “‘or’-parentheticals, ‘that is’-parentheticals and the pragmatics of reformulation.” *J. Linguistics* 43, 311-39.

ポスター発表 (10:00~11:30)

会場：AC533

[*奇数番号 10:00-10:45/偶数番号 10:45-11:30]

会場担当：ツオイ・エカテリーナ

①谷口 龍子 (東京外国語大学)・中村 栞 (上海外国語大学)・梅田 里菜 (東京外国語大学[院]): 日本語の自然会話における1・2人称主語の言語化の要因 —発話機能と主語の意味機能を手がかりに—

本発表の主眼は、日本語の自然会話において1・2人称主語が言語化されている発話文の発話機能および談話の特徴を示すことである。

『日本語日常会話コーパス』(CEJC 国立国語研究所: 84 会話、84,969 発話文数)から1・2人称主語を抽出し、それらが含まれる発話文の発話機能を分類、さらに甲斐(2000)の基準により談話レベルで分類した。甲斐(2000)では非言語化されやすいとされる談話に主語が言語化されるものがあり、話者の認識的権威との関連を提示する。

参考文献：(1)甲斐ますみ.2000.「談話における1・2人称表現主語の言語化・非言語化」『言語研究』第117号.71-100.日本言語学会.(2) 山岡政紀.2008.『発話機能論』.東京:くろしお出版.(3) Heritage, J. 2013. Epistemics in conversation. In Sidnell, T., and Stivers, T.(eds.), *The Handbook of Conversation*

②宮永 愛子 (山口大学): 三者会話における発話の共同構築 —日本語とフランス語の比較を通して—

複数の話者によって発話を共同で構築するという現象は、しばしば日本語の会話の特徴であるとされることも多いが、英語やロシア語、フランス語などにもあることが報告されている。本研究では、発話の共同構築という現象の普遍性と言語個別性を探るために、日本語と、日本語とは類型論的に見て距離のあるフランス語における発話の共同構築現象を、ターン交替の観点と統語的な観点から分類を行い、比較した。その結果、いずれの言語においても、相手への共感や理解、共通認識を示しながら、積極的に会話に参加する手段として共同構築発話が用いられている一方で、日本語では、ターンの数が多く比較的長い傾向にあることや、先行部分として従属節が多いこと、後続部分における継続のマーカ―としての助詞の存在があること、また、フランス語では、音声的重なりが多いことや、C'est 構文の存在など、個別言語の特徴による振る舞いの違いも見ることができた。

参考文献: (1) 林誠. 2017. 「会話におけるターンの共同構築」『日本語学』36 (4), 128-139. (2) Chevalier F.H.G. and Clift R. 2008 “Unfinished turns in French conversation: Projectability, syntax and action.” *Journal of Pragmatics* 40(10), 1731-1752.

③張 琴琴 (北海道大学[院]): 日本語教育における概数数量詞の形態音韻論

本発表は、「2, 3人」、「3~5個」といった概数を表す数量詞に焦点を置き、形態音韻論の観点からその形態と音韻の対応関係を明らかにするものである。数詞の並び方から日本語の概数数量詞を隣接型と非隣接型に分類できるという仮説を立て、中国で最も多く日本語学習教材として使われている『新版 中日交流標準日本語』初級上・下と中級上・下、高級上・下の6冊から実例を収集し、録音を合わせて隣接型と非隣接型の形態と音韻対応関係を分析した。さらに、「から」、「か」、「ないし」、「 \emptyset 」といったものを使ってテストし、形態的な「有標性 (markedness)」の概念を用いて隣接型と非隣接型の学習上の難度が予測でき、文体レベルから語用論的な違いも反映していると主張する。

結果として、有標性から形態的には隣接型が有標であり、非隣接型のほうが無標であるということが判明し、日本語学習者にとって音韻上非隣接型より隣接型のほうが難しいとわかった。

④鈴木 梓 (福井大学): 日本語教育における現代語指導について —SNSでの「なにげに」の例から—

日本語教育の場面では、若者言葉についても説明の必要がある。現代語用法を扱う場合について、本研究では「なにげに」を例に概観する。「なにげ (何気) に」は、現在は「なにげ」の形でも使用され、「何気なく」が変化した形とされる。文化庁調査でも扱われ、一定の認知を得た表現と言え、近年では「さりげなく」も「さりげ (に)」と似た形式変化をしており、並べて論じられることが多い。「何気なく」と同様に「特別な意図はなく」という意味で用いられ始めたが、現在では「比較的」、さらには「実は」の意味で話者の個人的な事情に言及する場合に使用される(「何気に初めてだった」など)。この個人的事情に関しては現時点で辞書などの定義は見られず、「新ぼかし表現」の「近づかない配慮」に共通する現代の配慮表現の側面を帯びつつある。本研究の目的は、意味拡張の変遷を SNS やマンガなどの実例から明らかにし、実用的指導への一提案を行う。

参考文献: (1) 陣内正敬. 2006. 「ぼかし表現の二面性—近づかない配慮と近づく配慮—」『言語行動における「配慮」の諸相』. くろしお. (2) 新野直哉. 2011. 『現代日本語における進行中の変化の研究 「誤用」「気づかない変化」を中心に』ひつじ書房. (3) 田中真理. 2002. 「なにげなく」から「なにげに」へ』『創造と思考 12』. 29-31.

⑤楊 世沢 (京都大学[院]): 中国語“给”に関する語用論的考察

本発表は、中国語“给” (give) の語用論的意味を考察することを目的とする。具体的には、本発表は「上下関係」、「親疎関係」、「発話場面」、「能力の差異」という4つのパラメータを設定し、中国語“给”の恩着せがましいニュアンスが生じる状況を探り、「给」の有無による語用論的含意を考察した。考察したところ、以下の2点が明らかになった。

①「给」による恩着せがましさは上下関係や親密関係との関わりが薄く、客観的な条件ではなく、聞き手自身による相対的な能力不足の場合や人が集まる発話場面で“给”が用いられると、恩着せがましさが生

じやすい。

② “給”の省略により、上記のニュアンスを解消することができるが、“給”を省略すると、「聞き手と同じグループにいる」という含意が生じるので、同じレベルの親しい間柄にしかこの方策は使われない。

⑥楊 留 (筑波大学[院]): 語用的装置としての声は何を喚起するか 一声優にまつわるメディア・イデオロギーの包括的モデルの構築を目指して—

本発表では、声優が架空のキャラクタを演じる際の音声がどのように理解され得るか、それを支えるメディア・イデオロギーを包括的に捉えるモデルの構築を試みる。具体的には、仮説と検証との2部に分けて発表を行う。まず、コンテキストへの依存度、及び、声優自身の意志の関与度を元に、それぞれ「声優の演技はコンテキスト(作品)に依存する/しない」「声優は自らの意志で/指示に従って演技をする」との2本の軸を組み立てる。次に、イギリス人俳優とその吹き替え声優が出演するプロモーション動画を用いて、声優の演技に関しどのようなイデオロギーが見出せるか検証する。結果、俳優が持つ「声優の演技は作品に依存せず、自らの意志で行い得る」と、声優が持つ「声優の演技は作品に依存し、指示のもとで行わなくてはならない」とのイデオロギーが明らかになった。また、それらのイデオロギーは定めたものではなく、動的に現前化し、交渉されると主張する。

参考文献(1)定延利之. 2011. 『日本語社会のぞきキャラくり——顔つき・カラダつき・ことばつき』. 三省堂. (2)Goffman, Erving. 1981. “Forms of Talk.” Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

サロン 語用論茶寮 (12:00~12:45)

会場: Room4 (AE351)

海外語用論研究の動向: IPC18 Brussels 2023 (IPrA) の参加報告から

講師: 西田光一 (山口県立大学) ほか

進行: 小松原 哲太

シンポジウム Symposium (13:10~15:40)

会場: AB103

言語コミュニケーション能力の「評価」をめぐって

司会/コメンテーター: 岡本 雅史 (立命館大学)

1. 趣旨

本シンポジウムが目指すのは、語用論を臨床・教育の現場で応用可能な実践理論として学際的に発展させることである。そこで、そうした実践の場で追求されている、言語コミュニケーション能力の「評価」に焦点を当て、その多様性・多元性について議論したい。具体的には、学習者の言語運用能力の熟達を目指す言語教育(日本語教育学・英語教育学)と、子どもたちの言語コミュニケーション能力の発達を測るコミュニケーション障害学、の各分野において、どのように評価軸・評価次元が定められ、どのような評価手法が開発されているか、さらには、現状でどのような困難が生じているのか等について最新の研究動向を紹介する。

2. 登壇者紹介

李 在鎬 (早稲田大学教授): コンピュータを活用したパフォーマンス評価について研究。これまで日本語能力試験をはじめ、10以上の大規模テストの開発や実施に関わってきた。

木村 修平 (立命館大学教授): 専門領域は英語教育におけるICT(情報通信技術)の活用。立命館大学で展開中のプロジェクト発信型英語プログラムを運営。ニューラル機械翻訳や生成系AIを正課授業に大規模導入した事例として注目されている。

大井 学 (金沢大学名誉教授・同子どものこころの発達研究センター): 各種神経発達症のコミュニケーション障害を研究。最近は主に自閉スペクトラム症の語用障害。子どものコミュニケーション・

チェックリスト (CCC-2) 日本版標準化、ことばのつかいかたテスト (TOPJC) 開発。

3. 発表内容 (話題)

発表 1: 日本語教育における評価の現状と課題

李 在鎬 (早稲田大学)

日本社会の変化に応じて、日本語教育の目標は変化してきた。とりわけ「評価」ということに関していえば、「日本語について何を知っているのか」という観点から「日本語を使って何ができるか」という観点へとシフトしてきたと言える。こうした言語能力観・コミュニケーション能力観の変化は、日本社会の多文化共生化の進行に応じて、さらに加速化することが予想される。本発表では、こうした現状を踏まえ、今後の日本語教育の評価研究ではどのようなアプローチが必要かについて考える。

発表 2: プロジェクト型英語教育における評価の難しさの可能性

木村 修平 (立命館大学)

立命館大学では 2008 年度より 4 学部でプロジェクト発信型英語プログラム (PEP) という特徴的な英語プログラムが実施されている。プロジェクト型学習の手法を採るこのプログラムでは「読む」「聴く」「書く」「話す」という従来型の 4 技能では捉えきれないあらたなスキル観・能力観を見出している。それは、プロジェクトに必要な情報を調べる「リサーチ」、調べた情報をまとめる「オーサリング」、他者と意見や評価を交換する「コラボレーション」、プロジェクトの進捗や成果を発表・表現する「アウトプット」のという「新しい 4 技能」だ。これらは従来型 4 技能に比べて評価が難しいが言語教育の分野に新たな地平を拓く可能性がある。

発表 3: CCC-2 と TOPJC: 臨床的な目的のための語用能力発達評価法

大井 学 (金沢大学)

語用能力発達評価の信頼性・妥当性を備えたツールは、Bishop (2003) が開発し数十か国で利用中の、親・担任の報告に基づく The Children's Communication Checklist-2 (CCC-2) のみである。演者は CCC-2 日本版を標準化し、3-15 歳児の各年齢集団内位置を特定する手段として実用に供している。加えてオンライン語用能力課題への反応に基づき、4-15 歳児の各年齢集団内位置を特定する、ことばのつかいかたテスト (TOPJC) を開発、標準化の上実用に供する予定である。二つの評価法の概要、それらにより把握される語用能力発達過程、ASD 児者と定型発達児者との関係について述べる。

大会発表賞表彰式 Best Presentation Award Ceremony/閉会式 Closing Ceremony Closing Ceremony (15:40~16:00)

会場: AB103

